The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞トマス・キッド『スペインの悲劇』翻訳(1)
Author(s)	キッド, トマス; 中村, 未樹
Citation	大阪大学英米研究. 2016, 40, p. 51-97
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99401
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

トマス・キッド『スペインの悲劇』翻訳（1）

中村　未樹

はじめに

以下に掲載するのは、エリザベス朝の劇作家トマス・キッド（Thomas Kyd, 1558～1594）による『スペインの悲劇』の前半部分（1幕1場から3幕6場まで）の翻訳である。

トマス・キッドは1558年、ロンドンに生まれた。1565年にキッドはマーチャント・テイラーズ・スクールに入学し、1573年か1575年頃まで在籍したようである。その後は貴族の下で働いていたと思われる。（scrivenerの仕事をしていたとも考えられている。）1583年から1585年頃には女王一座に劇を提供していたと推測されている。『スペインの悲劇』の制作年代については議論が分かれているが、1582年から1592年の期間において書かれている。1592年に最初の版が出版され、1602年には加筆された版が出された。この加筆部分の作者についてはベン・ジョンソンやシェイクスピアなどの候補が挙げられている。『スペインの悲劇』の最初の記録された上演は1592年であるが、それ以前にも何度か上演されていると考えられる。『スペインの悲劇』はイングランドにおける復讐劇の流行を契機づけた人気作品であり、ウィリアム・シェイクスピアの作品にも影響を与えている。（キッドは現存しない『原ハムレット』の作者であるとも言われている。）1593年、トマス・キッドの住んでいた家に枢密院による家宅調査が入った。そこで発見された文書をめぐる容疑で彼は投獄され、おそらくその時に拷問を受けている。後にキッドは釈放されたが、1594年に死亡している。

後半部分（3幕7場から4幕5場まで）の翻訳は別稿で行うことにする。

枚数の都合のため原典における韻文等を考慮した改行は行っていない。1592年版にのみ存在する箇所については(1592年版)と記載し、太字にしている。同様に1602年版における加筆部分については(1602年版)と記載し、これも太字にしている。

底本としたのはClara Calvo and Jesús Tronch eds. *The Spanish Tragedy.* London : Bloomsbury, 2013.（Arden Early Modern Drama）である。他には以下のエディションを参照した。

1. Edwards, Philip ed. *The Spanish Tragedy.* London : Methuen, 1959.（The Revels Plays）
2. Cairncross, Andrew S. ed. *The First Part of Hieronimo and The Spanish Tragedy.* Loncoln : U of Nebraska P, 1967.（Regents Renaissance Drama）
3. Tydeman, William, ed. *Two Tudor Tragedies.* London : Penguin, 1992.（Penguins Classics）
4. Bevington, David, ed. *The Spanish Tragedy.* Manchester : Manchester UP, 1996.（Revels Student Editions）
5. Mulryne, J. R. ed. *The Spanish Tragedy.* London : A & C, 2009.（New Mermaids）
6. Smith, Emma ed. *Five Revenge Tragedies : Kyd, Shakespeare, Marston, Chettle, Middleton.* London : Penguin, 2012.（Penguin Classics）
7. Neill, Michael, ed. *The Spanish Tragedy.* New York : Norton, 2014.（Norton Critical edition）

日本語訳としては以下の二点が出版されており参考にさせていただいた。

1. 村上淑郎　訳　『スペインの悲劇』　小津次郎、小田島雄志編　『エリザベス朝演劇集』　筑摩書房、1974 4-52頁
2. 斎藤國治　訳　『スペインの悲劇』　斎藤國治、村上文昭訳　『エリザ朝初期悲劇喜劇集』　中央書院、1981 74-188頁

また、次の本には日本語による詳しい注釈がある。

入江恭子　編注『スペインの悲劇』篠崎書林、1972

中村　未樹

トマス・キッド『スペインの悲劇』

登場人物

アンドレアの亡霊	生前はスペインの宮廷人、ベル＝インペリアの元恋人
復讐の神	
ヒエロニモ	スペインの司法官
ホレイショー	ヒエロニモの息子
イザベラ	ヒエロニモの妻
スペイン国王	
カスティール公爵シプリアン	スペイン国王の弟
ロレンゾ	カスティール公爵の息子
ベル＝インペリア	カスティール公爵の娘
ペドリンガーノ	ベル＝インペリアの家来
小姓	ロレンゾに仕える
将軍	
ポルトガル大公	
ペドロ	ポルトガル大公の弟
バルサザー	ポルトガル大公の息子
アレクサンドロ	ポルトガルの貴族
ヴィラッポ	ポルトガルの宮廷人
ポルトガル大使	
サーベリン	
ポルトガルの貴族	
その他	

第1幕

第1場　アンドレアの亡霊と復讐の神登場。

アンドレアの亡霊　永久のものである私の魂が気儘な肉体に閉じ込められ、その魂と肉体が互いを支えあっていた頃、私はスペインの宮廷に仕えていた。私の名前はアンドレア、家系は卑しくはないが私の青春に訪れたすばらしい幸運と比べるならば、それはかなり劣ったものだった。なぜなら私の人生の盛りの時、献身的に仕えてその人にふさわしい愛を示した結果、私は高貴な女性――名前はベル＝インペリア――と密かに関係を持ったのだ。だが、この夏の喜びの只中において死という冬が喜びの蕾を枯らせ、私と彼女は引き離されてしまった。先のポルトガルとの戦いにおいて、勇気に駆られた私は危険の渦中に踏み入り、私の命は傷口から出て死の道へと向かった。殺された後、私の魂は冥界に下り、アケロンの川を渡ろうとした。しかし、そこにいたただ一人の船頭カロンは愛想もなく私に言った、お前の葬儀はまだ行われていないからこの舟に乗ることはできない、と。太陽が海の女神テティスの膝元で三晩眠り、煙を上げる太陽神の馬車の熱を冷ます前に、スペイン宮廷の司法官の息子ホレイショーが私の葬儀を執り行ってくれた。それでカロンは納得して、恐ろしいアベルヌスの湖に繋がる泥土の岸辺へと連れて行ってくれた。私は甘い言葉を使ってそこにいた番犬ケルベロスの機嫌を取り、最初の危険な入口を突破した。そこからあまり離れていないところで、一万人ほどの人々の中にミノス、アイアコス、ラダマンテュスが座っていた。私の霊が通行証を求めて彼らに近づくと、ミノスの持つ運命の記録が出され、私の生と死の内容が明らかにされた。ミノスは言った、「この騎士は愛に生き、愛に死んだ、恋人のために戦の運に自らを賭け、戦の運のために恋人も命も失ったのだ。」「それでは」とアイアコスは言った、「彼をここから連れ出して、恋人たちとと

もに愛の野原を歩かせよう、そして緑のギンバイカとイトスギの木陰で永遠の時を過ごさせよう。」「いやいや」とラダマンテュスが続けて言った、「戦人を恋人たちの魂と一緒におくのは良くない。戦において彼は死んだのだから戦の野原に連れて行かねばならない、傷ついたヘクターが絶え間ない苦しみの中で暮らし、アキレスに率いられたミュルミドンの戦士たちが駆けずり回る戦の野原に。」すると、三人の中では一番穏やかな裁判官であるミノスが議論を終わらせるためにこのような計画を告げた――「それではこの男を我らが地獄の王のところに送り、最善と思われる裁きを下してもらおう。」この計画通りに、私の通行証はすぐに作成された。恐ろしい夜の闇の中、冥界の王プルートの宮廷に至る道を歩いている間、私は言葉で言い表せないほどの、ペンでは書き尽くせないほどの、そして人間の想像をはるかに超えた光景を目の当たりにした。そこには三つの道があった。右側の道は、恋人たちと戦人がそれぞれ暮している前に述べた野原へとつながるものであり、その二つの野原は境界によって分けられている。左側の道は地獄の奥底へと続く恐ろしい下り坂である。そこでは残酷な復讐の女神たちが鉄の鞭を振るい、哀れなイクシーオンは永劫に車輪を回している。また、金貸したちは溶けた金をその喉に押し込められ、淫らな者たちは醜い蛇によって体を締め付けられている。人殺したちは傷つけられても死ぬことができずに呻き声をあげ、誓いを破った者は煮えたぎった鉛で焼かれる。全ての邪悪な罪は拷問によって罰せられるのだ。私はこの二つの道の間にある道を歩いて、美しいエリュシオンの野原へと出た。野原の中央には荘厳な塔と真鍮の壁、そしてアダマントの門があった。そこでプロセルピナと一緒に居たプルートを見つけると、私は通行証を見せて恭しく跪いた。美しいプロセルピナは微笑んで、自分がこの男に宣告を与えたいと言った。プルートは満足し、彼女にキスをして承諾した。すると、復讐の神よ、プロセルピナはお前の耳に囁きかけ、静かな夜に真の夢が通っていく角の付いた門へと私を案内するように命じた。彼女がそう言うと、どのようにしてかはわからないが私たちはいつの間にかここに来て

いたのだ。

復讐の神　それでは知るがいい、アンドレアよ。ここでお前は、お前を殺したポルトガルの王子バルサザーがベル＝インペリアによって命を奪われるのを見ることになるのだ。私たちはここに座って、隠された意味を持つ出来事を見ようではないか。そしてこの悲劇のコーラスとなるのだ。（二人は舞台に座って劇を観る）

第2場　スペイン国王、将軍、カスティール公爵、ヒエロニモ登場。

国王　将軍、我が軍の状況を教えてくれ。

将軍　皆無事でございます、武運拙く戦死した者はごくわずかです。

国王　その喜んだ顔と早馬での報告はどういうことなのだ？運命の女神は我々に勝利を授けたのか？

将軍　勝ち戦でございます、陛下、損失もほとんどありません。

国王　ではポルトガル国王は献上金を支払うのだな。

将軍　はい、そしてこれまで通り我が国に従うとのことです。

国王　このように正義をもたらした天とその神々を祝福しよう。

カスティール公爵　「神によって愛される者よ、天はあなたとともに戦う。策謀を用いる者たちは跪いて斃れる。勝利は正しき者の仲間なのだ。」

国王　愛すべき我が弟カスティールよ、ありがとう。ところで将軍、我が軍の陣形と戦の結果について手短に教えてくれ。あなたの知らせによって我々の喜びはさらに大きくなるであろう。その武勲に対しては沢山の褒美と位でもって報いたい。

将軍　スペインとポルトガルのそれぞれの国境が交わるところで錚々たる陣容の両軍は出会いました。どちらの軍も十分な装備を持ち、どちらの心も意欲と恐怖に満ち、どちらも勇猛な容貌で相手を威嚇し、どちらも紋章が描かれた様々な旗を誇らしげに見せびらかし、どちらも喇叭、太鼓、そして笛を威勢よく鳴らし、そしてどちらも空に向かって物凄い雄叫びを発しましたので、谷と丘と川はこだまを返し、天もその音に恐れをなしまし

た。両軍とも本隊は四角の陣形を作り、その四方を火砲が防御しています。しかし、互いの軍が激突して白兵戦となる前に、私は後方から火砲の部隊を繰り出して戦いを開始しました。敵は側面部隊でもってこれに対抗します。互いに大砲を撃ち、隊長たちは自分の勇気を試しました。敵の主力の騎馬隊の旗手であるドン・ペドロは仲間とともに我が軍の陣形をかき乱そうとしました。しかし、立派な武将であるドン・ロジェロが鉄砲隊とともにそれに立ち向かい、その勢いを食い止めました。あちこちで激しい小競り合いが続けられる間に両軍は激突し、白兵戦となりました。両軍の火砲の轟は、巨大な岩壁に当たって陸地をも飲み込もうとする海の唸るような高波の音に似ていました。戦争の女神ベローナが方々を動く間、鉄砲の玉は冬の雹のように降りかかり、震える槍で空は暗くなりました。足と足、槍と槍、腕と腕、そして人と人がぶつかりました。敵味方どちらの側においても隊長が斃れ、重傷を負った兵、そして殺された者もいました。頭部が切り離された死体が横たわり、血を流す脚と腕、剣、そして腸がはみ出て地面を赤く染めている馬の死体が草原には並んでおりました。この混戦において3時間以上も勝敗は定まらないままでしたが、アンドレアが勇敢な槍騎兵を率いて敵の本隊を突破したため、敵兵の一部は討ち取られ、多くの兵が後退しました。しかし、ポルトガルの若き王子バルサザーが援軍に駆けつけ、踏み止まるよう兵たちを鼓舞しました。そこからまた新たに戦いが始まり、アンドレは殺されました。勇猛な武人である彼もバルサザーには勝てなかったのです。しかし、王子が死んだアンドレアを足下に置いて我が軍の名誉を汚すような傲慢な言葉を述べていると、友情と勇気に駆られた司法官の息子のホレイショーが王子との一騎打ちを挑みました。二人の戦いは長く続かず、すぐに王子は馬から叩き落されて捕虜となりました。王子が囚われると、残りの者たちは皆逃げ出しましたが、我が軍の鉄砲隊がそれを追って殲滅し、太陽が西に沈む頃に喇叭兵が軍の撤退を命じました。

国王　よい知らせに感謝するぞ、指揮官。とりあえずの褒美としてまずはこ

れを受け取ってくれ。（王は指揮官に首飾りを渡す）ところで、和平の協定は結んだのか？

将軍　条件付きの和平としました。つまり、献上金を支払って服従するならば陛下の怒りは収まるということに。この条件をポルトガルの大公は受け入れました。（国王に手紙を渡す）死ぬまでスペインに貢物を支払うと大公は誓っております。

国王　その言葉、そしてこの功はお前にふさわしいものだ。さて、司法官よ、ともに喜ぼうではないか。お前の息子がこの戦いで手柄を立てたのだ。

ヒエロニモ　私の息子が今後も長く生きて陛下にお仕えできますよう、そしてもし陛下に背くようであればすぐにその地位を失いますように！（舞台奥で喇叭の音）

国王　お前も彼も褒美を貰えずに死ぬということはないようにしよう。この喇叭は何の合図だ？

将軍　運よく戦から生きて帰った陛下の軍の者たちが、謁見を賜るため御前まで行進してまいります。彼らの元を去る際にそのように申し付けておりましたので。300 数名の戦死者以外は無事に帰還し、敵から戦利品を奪い取ったことが一目瞭然となりますかと。

軍隊登場。バルサザーがロレンゾとホレイショーの間に挟まれて登場。

国王　これは喜ばしい眺めだ。兵たちをここまで連れてくるように。

軍隊、舞台を横切って退場。

私の意気揚々たる甥によって連れていかれたのが勇猛なポルトガルの王子か。

将軍　あれがポルトガルの王子です。

国王　では、手柄を分かち合うように王子のもう一方の腕を捕まえている者は誰か。

ヒエロニモ　あれは我が息子でございます、陛下。幼少の頃より私は彼の幸

福ばかりを願っておりましたが、今ほど息子がこの父の目を喜ばせたことはありません。またこれほどの溢れる喜びで心を満たしてくれたこともありません。

国王　彼らにこの城壁の周囲をもう一度行進するように伝えてくれ。ここで立ち止まらせて、あの勇敢な捕虜そして二人の護衛たちと話したいから。（将軍退場）ヒエロニモよ、立派な息子の手柄によってお前もこの勝ち戦に貢献したことをとても嬉しく思うぞ。

軍隊再び登場。

ポルトガル王子をここへ。残りの者は行進を続けるように。解散する前に兵たちには2ダカット、隊長たちには10ダカットを与え、歓迎の意を伝えよう。

バルサザー、ロレンゾ、ホレイショー以外の兵士たちは退場。

ようこそ、バルサザー。甥よ、よく戻ってきた。そしてホレイショー、お前もよくやった。王子よ、お前の父親が義務である献上金の支払いを頑なに拒んだため我々は武力という悪しき手段で応じたが、スペインはお前に対しては礼節をもって接しよう。

バルサザー　友好関係において父が犯した過ちは、今や戦の運によってその責めを受けました。結果が定まった以上、それにとやかく言うことはできません。父の兵たちは殺され、国力は弱まりました。父の軍旗は奪われ、その名前は汚されました。彼の息子はこのように落ちぶれ、その父を悲しませることになりました。これらの罰が父の罪の贖いとなりますように。

国王　そうだ、バルサザー、この度の協定をお前の父が守るならば、我らの間の平和は戦争の結果、より強固なものとなるのだ。お前については自由というわけにはいかないが、卑しい捕囚からは解放しよう。聞くところによればお前の武勲は大きく、また実際に見たところ立派な人物であるようだから。

バルサザー　ご厚意に値するよう、励みます。

国王　ところで、その二人ともがお前の腕を掴んでいるのだが、どちらの捕

虜になったのか？

ロレンゾ　私でございます、陛下。

ホレイショー　私です、陛下。

ロレンゾ　この手が最初に王子の馬の手綱を捉えました。

ホレイショー　しかし、最初に私が槍で王子を馬から突き落としたのです。

ロレンゾ　最初に王子の剣を取り上げたのは私です。

ホレイショー　しかし、剣を王子に手放させたのはこの私です。

国王　王子の腕を放しなさい。（ロレンゾとホレイショーは王子から手を放す）王子よ、あなたはどちらに降参したのですか？

バルサザー　（ロレンゾの方を向き、次にホレイショーの方を向く）彼には礼節において屈しましたが、この男には力ずくで押さえられました。彼は丁寧な言葉を使いましたが、この男は私に打ちかかりました。彼は命を保証しましたが、この男は私を殺すと脅しました。彼は私の愛を勝ち取りましたが、この男には屈服しました。本当のところ、どちらにも降参しました。

ヒエロニモ　陛下が公平かつ賢明であることを私が知らないというのであれば、そして、この争いに関して私が息子の肩を持っているように思われるということでなければ、親としての情と戦の掟に従って息子ホレイショーの権利を主張したいところです。手柄を立てたと言えるのはライオンに致命傷を与えた者であり、そのライオンの毛皮を着ている者ではありません。死んだライオンなら兎でもその髭を掴むことはできるはずです。

国王　安心するがいい、司法官よ、不当なことはしない。お前のためにも、その息子が権利を失うことはないように取り計らおう。両人とも、私の裁定に従うか。

ロレンゾ　陛下のお計らいのままに。

ホレイショー　私も同じです、たとえ我が権利を手放すことになりましょうとも。

国王　それでは、この言い争いはこのような裁定でもって決着とする。両人

とも褒美に値するから、両人ともに褒美を授けよう。甥よ、お前は王子の剣と馬を奪った、だからその武器と馬を褒美とするように。ホレイショー、お前が最初に王子を降参させたのだから、その勇敢さは彼の身代金でもって報いよう。金額は王子と決めなさい。だが甥よ、お前は王子の身を預かるように。彼のような客人を迎えるには立場上、お前がふさわしいから。ホレイショーの家だと彼の従者たち全てを泊めるには手狭だろう。ただし、それではお前の方が褒賞が多くなるな。手柄にふさわしいものとするため、ホレイショーには王子の鎧を与えることにしよう。バルサザー、この裁定ではどうか。

バルサザー　承知しました、陛下、それでもしホレイショーがともに居てくれるということでしたら。彼の技量には感心いたしておりますので。

国王　このようにお前を好いてくれる王子から離れぬようにしなさい。それでは、兵士たちへの支払いを済ませたら、友人としてこの捕虜の王子をもてなそう。（全員退場）

第3場　ポルトガル大公、アレクサンドロ、ヴィラッポ、及び従者たち登場。

大公　大使はスペインに向かったのか。

アレクサンドロ　出発してから二日になります。

大公　献上金を持っていったか？

アレクサンドロ　はい。

大公　では、休まらない心においてしばらく休もう、そして悲しみには内なる溜息を与えよう、深い憂いは涙となって表面には表れてこないのだから。だが、なぜ私は王座に座っているのだ？（地面に座り込む）哀れな人間の終わりのない嘆きにはこのほうがふさわしい。いや、これでも私の運命と比べれば高い、私の境遇には似合わない。そうだ、憂鬱の表れであるこの地面は、惨めな境遇へとその運が落ちた者たちを求めている。ここに横たわろう、今や私は一番下にまで落ちたのだから。地面に横たわるものは、もうそれ以上落ちることはない。運命の女神の私への危害は終わっ

た。もう私を傷つけるものは何もない。しかし、運命の女神は私の王冠を取り上げるかもしれない。（王冠を手に取る）さあ、これを取るがいい。どんなに悪いことでもすればいい。彼女はこの喪服を私から取り上げたりはしないはずだ、彼女が羨むのは喜んでいる者たちだけなのだから。運とはなんと意地悪で、愚かなものであることか。運命の女神は盲目で、私の長所が見えない。また、耳も聞こえないから私の嘆きも聞いてはくれない。いや、たとえ聞こえたとしても、彼女は気まぐれで私の不幸を憐れむことはない。憐れんでくれたとしても、何か変わるだろうか？運命の女神の助けを期待できようか、その足は転がる石の上にあり、その心は気まぐれな風よりも変わりやすいというのに？では、状況が良くなる望みもないのに、何故私は嘆くのか？嘆くことで悲しみが実際よりも小さく見えるからだ。先の私の野心によって私の信用は汚れ、信用を裏切ったため血を流す戦争が起こり、血を流す戦争によって私の財産は費やされ、財産とともに我が民の血が、そして彼らの血とともに私の喜びであり最愛の者、私の一人息子が失われたのだ。なぜ私自らが戦争に行かなかったのだ？原因は私だから、息子ではなく私が死ぬはずだったのだ。私は熟した老人だが、彼は将来のある若者だった。私の死は自然なことだが、彼の死は強いられたものなのだ。

アレクサンドロ　陛下、きっと王子は生きております。

大公　もしそうだとしたら、どこにいるのだ？

アレクサンドロ　スペインです、武運拙く捕虜となって。

大公　その場合、父の犯した罪のために息子はもう殺されているだろう。

アレクサンドロ　それでは戦の掟に背くことになります。

大公　復讐を求めるものは掟など気にはしない。

アレクサンドロ　身代金のことを考えれば、そのようなひどい仕返しはしないでしょう。

大公　いや、もし生きているなら知らせがすぐに届くはずだが。

アレクサンドロ　悪い知らせほど早く届くものです。

大公　もうそのことはよい、息子は死んだのだから。

ヴィラッポ　（跪く）陛下、悪い知らせをお許しいただけるならば、御子息がどうなったかお伝えします。

大公　話すがいい、どんな知らせであろうとも礼はしよう。私の耳は悪い知らせを受け入れる準備はできている、私の心も不幸の攻撃に耐えられるくらい固くなっている。立ち上がって、全て申してみよ。

ヴィラッポ　（立つ）それでは私がこの目で見た真実を聞いてください。両軍が戦っている時、武勲を得ようとしたバルサザーは激戦の渦中において素晴らしい戦いぶりを見せました。私は彼が敵の将軍と一対一で対決しているのを見ました。しかし、ここで忠実な家来のふりをしておりますアレクサンドロが、敵の将軍を撃つようなふりをして王子の背中に向けて発砲しました。それでバルサザーは倒れ、味方も退却を始めたのです。王子が生きておりましたら勝ち戦だったはずです。

アレクサンドロ　なんという嘘を！お前こそが反逆者だ。

大公　静かにしろ。ヴィラッポ、では息子の死体はどうなったのだ。

ヴィラッポ　敵が陣へと引きずっていくのを見ました。

大公　そうか、夜毎の夢はこのことを私に伝えていたのか。（アレクサンドロに）偽り、不忠、忘恩に身を委ねて反逆を行った獣め、こんな裏切りをさせるような仕打ちをバルサザーがお前にしたのか？スペインの金に目がくらんで私の良さが見えなくなったのか？お前はテルセイラ島の領主だから、私の息子そして私が死んだらこの王冠を手に入れようという望みがあったのだろう。しかし、お前の野心は自らの首を折ることになるのだ。この王冠が、我が息子の血を流させたものなのだ。（王冠を手に取り、また被る）この王冠はお前の血が流れるまでは被っておこう。

アレクサンドロ　恐れながら、陛下、お聞きください。

大公　連れて行け、この男の姿は地獄そのものを思わせる。処刑について決定するまで牢に閉じ込めておけ。（アレクサンドロ、護衛とともに退場）バルサザーが死んだのなら、奴は生かしておくまい。ヴィラッポ、褒美を

与えるから来なさい。（大公、従者と共に退場）

ヴィラッポ　こうやって俺は悪意の入った嘘で王を騙し、敵を裏切って悪事の報酬を得るのだ。（退場）

第4場　ホレイショーとベル＝インペリア登場。

ベル＝インペリア　ホレイショー、ここで今からアンドレアの死の詳細を話してください。生きている時は私の花飾りの最も美しい花であった、そして死によって私の喜びを葬ったアンドレアについて。

ホレイショー　彼への愛とあなたへの忠誠のためにも、この悲しい任務は断れません。涙と溜息で話せなくなるかもしれませんが。両軍が対峙した時あなたの恋人の勇者はその中におり、名誉ある目的のため一番の手柄を立てようとして、ついにバルサザーとの一騎打ちとなりました。二人の戦いは長く続き、二人の心は勇敢で、二人の叫びは恐ろしく、二人の力は拮抗し、ともに危ない一撃を加えようとしました。しかし、怒れる復讐の女神、あの邪悪な力がアンドレアの名声を妬み、その名声を終わらせるために彼の命を切りました。復讐の女神は、アテネが驕れるペルガモンの要塞に現れたように、自ら武具を纏って槍部隊を送り込みました。その新手の兵たちがアンドレアの馬の腹を刺し、彼を地面に落としました。すると、残虐な怒りに駆られたバルサザーがこの窮地を狙い、槍部隊に続いて最後の攻撃を加えてアンドレアは殺されました。その後、もはや遅すぎたのですが、悲しみで激高した私が仲間とともに王子を追い、彼を槍部隊から引き離して捕虜としました。

ベル＝インペリア　私の恋人を殺した男を殺してくれたらよかったのに！それで、アンドレアの遺体は奪われたのですか。

ホレイショー　いいえ、私は特にそれを求めていましたから、遺体を取り戻すまでは引き下がりませんでした。私は彼を地面から起こして抱きしめ、私の陣営にまで運びました。そこで彼を寝かせ、我が涙で遺体を濡らし、友人として溜息を漏らして悲しみました。しかし、友の悲しみと溜息、そ

して涙をもってしても青白い顔をした死が奪った彼の命の権利を取り返すことはできませんでした。ただ、彼の葬儀を丁重に行うよう取り計らいました。このスカーフは死んだ彼の腕から取ったものです、友の形見として身に着けております。

ベル＝インペリア　そのスカーフは知っています。彼がそれをずっと持っていてくれたらよかったのですが。もし彼がまだ生きていたら、私ベル＝インペリアのために彼はそれを身に着けてくれていたでしょう。そのスカーフは戦いに出る前に私が与えたものなのです。しかし、これからは彼と私のためにあなたが持っていてください。彼が死んだ今、あなたが一番それにふさわしいでしょう。あなたのこれまでのアンドレアに対する親切のお礼として、ベル＝インペリアの命が続く限りあなたに感謝する友人となるつもりです。

ホレイショー　ホレイショーも美しいベル＝インペリア様に謹んでお仕えするよう努めます。よろしければ、これから王子を探しに行きたいと思います、あなた様の父上の公爵にそのように命じられましたので。（退場）

ベル＝インペリア　では行きなさい、ホレイショー、一人にしてください。この憂鬱な気分には孤独が一番合いますから。しかし、アンドレアの死を嘆いて何になるだろう、その結果ホレイショーが新しい恋人になってくれたというのに？彼があのようにアンドレアを愛していなければ、私の心の中に彼が住まうこともなかった。でも、私の恋人の死を復讐するまではこの胸に恋が宿ることはない。そうだわ、この新しい恋が私の復讐を助けてくれる。私のアンドレアの友人だったホレイショーを愛そう、彼の死をもたらした王子に報復するために。私の恋人を殺したバルサザーが今、私の愛を求めて来ているけど、私に軽蔑されて自分の犯した殺人を長く後悔することになる。戦いにおける名誉も考えず、立派な騎士一人を大勢で打ちのめすなんて全く臆病な人殺しとしか言いようがないわ。私の喜びを殺した男が来たわ。

ロレンゾとバルサザー登場。

ロレンゾ　妹よ、そのように憂鬱な顔をして歩いているが、どうかしたのか。

ベル＝インペリア　しばらく一人になりたいと思いまして。

ロレンゾ　だが、王子がおまえに会いに来ているのだ。

ベル＝インペリア　王子は自由の身になったのですね。

バルサザー　いいえ、嬉しい服従の中にこの身を置いております。

ベル＝インペリア　飾った言葉があなたのいる牢獄なのですね。

バルサザー　つらい思いに捕らわれているのです。

ベル＝インペリア　では、あなたが解放されるよう心の中で想像してごらんなさい。

バルサザー　しかし、私の思いは私の心も担保に差し出してしまったのです。

ベル＝インペリア　それなら借金を払って、心を取り戻したらいいでしょう。

バルサザー　心が今住まうところから戻ったら、私は死んでしまいます。

ベル＝インペリア　心臓がなくて生きているなんて、奇跡だわ！

バルサザー　はい、愛はそのような奇跡を起こすのです。

ロレンゾ　さあ、そのような回りくどい言い方はやめて、わかりやすい言葉で妹に愛を伝えてください。

ベル＝インペリア　嘆いて良いことがあるかしら、治る見込みもないのに？

バルサザー　そうです、美しいあなたに私の愛の嘆きを伝えなければならないのです。あなたの優しい答えで私は癒されます。私の全ての思いはあなたの素晴らしさに魅了され、私の目はあなたの顔に美の住まいを見、私の心はあなたの輝く胸の中に宿っているのです。

ベル＝インペリア　このようなありきたりの台詞を言って、私をここから追い出したいのですね。

退出する際に彼女は手袋を落とし、入ってきたホレイショーがそれを拾う。

ホレイショー　手袋がここに。

ベル＝インペリア　ありがとう、それはお礼に取っておきなさい。（退場）

バルサザー　ホレイショーはよい時に屈んだな。

ホレイショー　身に余る光栄にございます。

ロレンゾ　（バルサザーに）すんだことは仕方がありません。女はきまぐれなものです。あのような曇った表情も風が少し吹けば消えてしまいます。私にまかせてください、なんとかしましょう。それまでは何か楽しい遊びでもして過ごしましょう。

ホレイショー　国王がポルトガルの大使をもてなすため、こちらにすぐ来られます。もう準備もできているようでした。

バルサザー　ではここで王を待ちましょう、大使にも会って、父と国の様子を聞きたいから。

テーブルが運び込まれる。トランペット奏者、国王、ポルトガル大使、カスティール公爵、及び貴族たち登場。

国王　御覧なさい、大使よ、スペインが捕虜である大公の息子バルサザーをどのように遇しているか。私は戦争よりも思いやりを好むのです。

ポルトガル大使　王子のバルサザーが殺されたと思って、国王は悲しみポルトガルは嘆いております。

バルサザー　（傍白）確かに、横柄な美しい人のために殺されたようなものだが。（大使に対して）大使よ、私がどうやって殺されたか見なさい。私はカスティール公爵の息子と遊び、宮廷の様々な楽しみに興じ、国王のご厚意を頂いております。

国王　挨拶は宴の後にしましょう。（座る）こちらに来て座ってください、食事をどうぞ。（大使は宴席に座る。続いて、バルサザー、カスティール公爵、ロレンゾ、貴族たちも着席。）王子よ、座ってください、あなたはもう一人の主賓だから。弟も座りなさい。甥よ、お前も。ホレイショーは酌をしなさい、お前にはその名誉がふさわしい。さあ、どうぞ始めてください。スペインはポルトガルであり、ポルトガルはスペインなのです、私

たちは友となりました。献上金は支払われ、私の権利も回復しました。ところで、司法官のヒエロニモはどこに行ったのだ？この宴席で壮麗な劇を見せて客人をもてなすと約束していたのだが。

ヒエロニモが鼓手、三人の騎士と共に登場。騎士はそれぞれ紋章の付いた盾を掲げる。続いて三人の王たちが登場。騎士たちは王たちの王冠を取り上げて捕虜とする。

なかなか面白い見世物だな、ヒエロニモ。意味はよく分からないのだが。

ヒエロニモ　盾を掲げている最初の騎士は（彼はその盾を取り上げて国王に渡す）イングランドのグロスター伯爵ロバートです。スティーヴン王がブリテン島を統治していた時、彼は2万5千の兵を引き連れてポルトガルに侵攻し、イスラム教徒だった王を屈服させてイングランドの支配下におきました。

国王　大使よ、これを見ればあなたの国王とあなたは慰められ、この度の一件の悲しみも小さく思えるだろう。ところでヒエロニモ、次は何を表すのか？

ヒエロニモ　盾を掲げました二番目の騎士はイングランドのケント伯爵エドマンドです。リチャード王がイングランドの王冠を戴いていた頃、彼も同じようにポルトガルに上陸してリスボンの城壁を破壊し、戦闘中にポルトガル国王を捕虜としました。これとその他の功績によって、彼はその後ヨーク公爵に任ぜられました。

国王　これもまた良い証拠でしょう。つまり、小国のイングランドにポルトガルが服従したということは、ポルトガルが我が国に屈するのは仕方ありません。ヒエロニモ、最後の者は誰だ？

ヒエロニモ　この三番目の最後の騎士も劣ったものではなく（前と同様の所作を行う）同様にイングランド人、勇敢なジョン・オブ・ゴーント、ランカスター公爵です。盾の紋章でお分かりになるかと。彼は強力な軍隊を率いてスペインを攻め、わがカスティール国王を捕虜としました。

大使　これは我が太守にとっては、スペインはこの勝ち戦に驕らないよう

に、という教えになりますね。イングランドの戦士たちはスペインも征服してアルビオンに屈服させたのですから。

国王　ヒエロニモ、この余興に感謝して乾杯しよう、大使も私も楽しんだ。杯を持て、ヒエロニモ。（ヒエロニモはホレイショーが差し出した杯を受け取る）大使よ、大したおもてなしもできずに長くなってしまいましたが、できる限り歓待させていただきました。さあ、中へ入って、あなたが早く出発できるようにしましょう、協議はもう始まったはずです。

第5場　アンドレアの幽霊と復讐の神、前に出る。

アンドレアの亡霊　私たちが冥界の底からやって来たのは、私に致命傷を与えたあの男が歓迎されるのを見るためだったのか？このような楽しい光景は私の魂を悲しませる。友好、愛、そして宴だけではないか？

復讐の神　静かに、アンドレア。ここを私たちが離れる前に、私は彼らの友情を残酷な悪意に、愛は死をもたらす憎しみに、昼を夜に、希望を絶望に、和平を戦争に、喜びを痛みに、幸福を不幸に変えてみせよう。

第2幕

第1場　ロレンゾとバルサザー登場。

ロレンゾ　王子、ベル＝インペリアはあのように恥ずかしそうにしていますが、どうか冷静になっていつものように楽しい気分でいてください。野生の雄牛もやがて軛に繋がれます。野生の鷹もやがて餌を取りに降りてきます。小さな楔もやがて固い樫の木を切り裂きます。か細い雨もやがて硬い石を貫きます。あの高慢さもやがては消えて、あなたが受けた苦しみに妹は同情するでしょう。

バルサザー　いや、彼女は獣や鳥、木や石の壁よりも手に負えず心が固いのだ。でも、なぜ私がベル＝インペリアの名前を汚さねばならないのか？責

められるべきは彼女ではなく私の至らなさなのに。私の容姿は彼女を満足させないし、私の言葉は無骨で彼女を楽しませるものではない。私が彼女に送る手紙は、牧神パンと森の神マルシュアスの笛が奏でる調べのように品がない。私の贈り物は高価でもない。価値のないものだから、私の苦労は全て無駄になる。だけど、勇敢さという点で彼女は私を愛してくれるかもしれない。そうだ、でも捕らわれの身になってそれも駄目になってしまった。だけど、彼女の父親を満足させるために私を好きになってくれるかもしれない。そうだ、でも彼女の理性には父親の要求も敵わない。だけど、兄の親友として私を好きになってくれるかもしれない。そうだ、でも彼女は他の人を好きなのかもしれない。だけど、自分の地位を上げるために私を好きになってくれるかもしれない。そうだ、でも彼女はもっと身分の高い相手を求めているのかもしれない。だけど、彼女に夢中になった私を愛してくれるかもしれない。そうだ、でも彼女は人を愛したりしないのかもしれない。

ロレンゾ　王子、お願いですからそのような感情的な態度はやめてください。きっと何か方法が見つかりますから。あなたが愛されない何らかの理由があるはずです、それを見つけて解決しないといけません。彼女が他の騎士を愛していたらどうしますか？

バルサザー　我が夏の昼は冬の夜へと変わってしまう。

ロレンゾ　この疑問を確かめるための手はずは既に打っています。ここは私に従ってください。何を聞いても、何を見ても邪魔はしないでください。どのようなやり方であれ、このことの真相を探ってみせますから。おい、ペドリンガーノ！

ペドリンガーノ　（舞台奥で）ご主人様。

ロレンゾ　すぐにこちらに来い。

ペドリンガーノ登場。

ペドリンガーノ　ご用は何でしょうか。

ロレンゾ　大事な用件だ、単刀直入に言おう。お前も知っているとおり、ア

ンドレアと彼女の間を密かに取り持ったことで罰を受けそうになったお前を、父の怒りから私が庇ったのはそう昔のことではないな。あれ以来、私はお前を取り立ててきた。私の質問に答えるなら、それに加えて褒美を与えよう。お礼の言葉ではなくて大金をだ。お前が本当のことを言うなら、私はずっとお前の友となろう。

ペドリンガーノ　どのようなご質問であれ、私の務めとして本当のことを話します、（傍白）本当のことを話せるならばだが。

ロレンゾ　では言ってくれ――妹の恋人は誰だ？彼女はお前を信用しているからな。答えるなら、我が友情も金も与えよう。アンドレアの代わりになったのは誰だ？

ペドリンガーノ　ああ、ご主人様、アンドレア様が死んでからというもの、前のように妹様には信用されてはおりませんので、恋人がいるかどうかは存じておりません。

ロレンゾ　そのようにごまかそうとするなら、私はお前の敵だ。(1602年版)（剣を抜く。）(1602年版)友情が要らないのなら力ずくでいくまでだ。生きて隠そうとするなら、隠したまま死んでもらおう。私より妹が大事だというなら死ぬがいい。

ペドリンガーノ　お待ちください、閣下。

ロレンゾ　本当のことを言え、礼はするから。今後何が起ころうともお前を守ってやろう、お前が言うことは何であれ誰にも言わないから。だが、まだごまかそうとするなら、お前を殺す。

ペドリンガーノ　もしベル＝インペリア様が恋をしていらっしゃるというなら――

ロレンゾ　なんだと、悪党、「もし」とは何だ。

ペドリンガーノ　（跪く）待ってください、妹様が愛しておられるのはホレイショーです。

バルサザー、後ずさりする。

ロレンゾ　なに、司法官の息子、ホレイショーか？

ペドリンガーノ　はい、その通りでございます。

ロレンゾ　どうしてそのことが分かったのか、話せ。これからお前のことは大事にする、金も渡す。立て、恐れないで言うのだ。

ペドリンガーノ　（立ち上がる）彼女はホレイショーに手紙を送っています。私も読みましたが、その内容は愛の言葉で溢れていました、バルサザー様より彼を愛しているということで。

ロレンゾ　お前の言ったことが真実であり、ここで言ったことは誰にも告げたりしないと、この剣の柄の十字にかけて誓うのだ。

ペドリンガーノ　私たち全ての創造主にかけて誓います。

ロレンゾ　その誓いが真実であることを期待して、金は与えよう。（ペドリンガーノに金を渡す）だが、もしお前が嘘つきだとわかったら、今お前が誓いを立てたこの剣がお前に悲劇をもたらすぞ。

ペドリンガーノ　私の言ったことは本当です、それにベル＝インペリア様にこのことを告げたりはしません。このように褒美を頂いたのですから、死ぬまであなた様にお仕えするつもりです。

ロレンゾ　では、これが最後の頼みだ――妹とホレイショーが会う日と場所を探り出して、こっそり私に教えてくれ。

ペドリンガーノ　わかりました。

ロレンゾ　その時には、私の気前の良さがまたわかるはずだ。妹よりも私の方がお前を出世させることができるのは知っているだろう。だからよく考えろ、私を落胆させないようにな。さあ、戻っていつも通り妹に仕えるのだ、いないことを怪しまれるといけないから。

ペドリンガーノ退場。

知恵と力を同等に、だ。言葉が駄目ならば暴力が効果的だ、だがそのどちらよりも有効なのは金だ。バルサザー王子、この作戦はお気に召しましたか？

バルサザー　そうだが、そうでもない。嬉しいが、悲しくもなる。嬉しいのは私の恋を邪魔する者がわかったこと、悲しいのは私の愛するあの人が私

を憎むかもしれないこと。嬉しいのは復讐する相手がわかったこと、悲しいのは復讐したら彼女が私から逃げていくということ。だが、復讐するか、あるいは自殺するまでだ、愛は拒絶されたら我慢ができなくなるのだから。ホレイショーは私の天敵に違いない。まず彼は剣を振り回し、その剣で戦いを挑み、その戦いで私に大きな傷を与え、その傷のために私は彼に降参し、降参して彼の捕虜となった。そして今、彼は人を喜ばせる言葉を使い、その言葉は甘美な内容を持ち、その甘美な内容には狡猾な嘘という罠が仕掛けられ、その狡猾な嘘は彼女の耳にお世辞を吹き込み、そして耳から彼女の心へと降りていき、私がいるべき彼女の心に居座ったのだ。あいつは力でこの私の体を取り押さえ、今では私の魂をも狡猾に捕らえようとしている。だが、彼が落ちていくよう運命の女神に頼もう。死ぬか、それとも彼女を手に入れるかだ。

ロレンゾ　行きましょう、このようにゆっくりしていては復讐が遅れます。私の言うとおりにしなさい、妹はあなたのものになりますから。妹の愛を得るには彼を始末しなければいけません。（全員退場）

第2場　ホレイショーとベル＝インペリア登場。

ホレイショー　さあ、あなたが見せてくれた愛によって、私たちの内に秘めた煙は炎となって燃え上がりました。そして、それ以上はないような幸せの源、つまり言葉を交わし見つめあうことで互いの気持ちを豊かにしました。ですが、このように愛の美しい語らいをしているのに、なぜそのように悲しんだ様子をされるのですか？

二階舞台にペドリンガーノがバルサザーとロレンゾを連れて登場。見つからないようにして、彼らに全てを見せる。

ベル＝インペリア　愛しい人、私の心は海の上の船のように港を求め、嵐で傷んだところを修理したいのです。海辺に停泊して、苦しみの後には喜びが、悩みの後には幸福が来るということを楽しく歌いたいと願っています。恐れと期待によって長く浮き沈みしていた私の心が休みたいといつも

願っている港はあなたの愛、そこで失われた喜びを取り戻し、愛の欲望がもたらす甘美な幸福をキューピッドの聖歌隊とともに安らかに歌うのです。

バルサザー　（二階舞台で）我が目よ、閉じろ、私の恋人が汚されるのを見るな。我が耳よ、聞くな、私の嘆きを聞いてはいけない。心よ、死ぬのだ、他の男がおまえのものを奪っている。

ロレンゾ　（二階舞台で）我が目よ、よく見張っておくのだ、この愛を引き裂くために。我が耳よ、聞いておくのだ、あの二人の嘆きを聞くために。心よ、生きるのだ、ホレイショーの破滅を喜ぶために。

ベル＝インペリア　なぜホレイショーはずっと黙っているのですか？

ホレイショー　言葉は少ないですが、たくさんの思いがあるのです。

ベル＝インペリア　特に何を思っているのですか？

ホレイショー　過去の危ない経験と、これからの喜びです。

バルサザー　（二階舞台で）過去の喜びと、これから起こる危ない事だ。

ベル＝インペリア　危ない経験と喜びとは、いったいどのような？

ホレイショー　戦争の時の危険と、愛の喜びです。

ロレンゾ　（二階舞台で）死の危険だけだ、喜びは終わった。

ベル＝インペリア　危険は去ったと思いましょう。戦争はあなたと私で行うのです、平和の約束を破らない戦いです。美しい言葉を話してください、私は美しい言葉で立ち向かいます。あなたの甘美なまなざしには、私も甘美なまなざしで応じます。愛の言葉には愛の言葉で答えます。キスにはキスで反撃します。これが私たちの戦う平和、平和な戦争です。

ホレイショー　では、戦いを最初に行う戦場を決めてください。

バルサザー　（二階舞台で）野心家の悪人め、何と大胆なことを！

ベル＝インペリア　それでは、私たちが最初に愛を誓ったあなたのお父さんのあの居心地の良い東屋を戦場にしましょう。宮廷は危険ですが、あの場所なら安全です。疲れた旅人たちを家に帰らせる合図となる金星が空に見える時に会いましょう。あそこなら私たちの話を聞くものは無邪気な鳥た

ちだけです。優しいナイチンゲールは私たちを知らぬ間に眠りにつかせ、その胸に棘を刺したまま、私たちの喜びと快楽を歌うことでしょう。その時までは1時間が1年以上にも思えることでしょう。

ホレイショー　恋人よ、お父上のところに戻りましょう。私たちの喜びには危険な疑いが付きまとうのですから。

ロレンゾ　（二階舞台で）その通りだ、疑いと悪意が込められた危険がお前の魂を永遠の夜へと送り込むことになるのだ。（全員退場）

第3場　スペイン国王、ポルトガル大使、カスティール公爵、貴族たち、及び従者たち登場。

国王　弟のカスティールよ、お前の娘のベル＝インペリアは王子の求愛にどう答えているのだ？

カスティール公爵　女性として恥ずかしそうにふるまい、王子への愛情を隠そうとしてはいますが、そのうちに応じるでしょう。もし彼女が頑なであるなら――そのようにはなりませんが――王子を愛するか、もしくは私の愛を失うかという私の忠告には従うでしょう。

国王　では、ポルトガルの大使、今回の同盟をさらに確かなものとするためにも、この縁談の話に賛同するよう大公に伝えてください。これが和平のためには最良の手段でしょうから。こちらからの持参金は十分に用意します。ベル＝インペリアは私の弟シプリアンの娘であり、相続人としてその領土の半分を受け継ぐことになりますが、叔父である私からの結婚のお祝いとしては――もし縁談がまとまれば献上金は免除し、二人の間に息子が誕生したら私の後継者としよう。

大使　大公にそのことを報告します、うまく説得できるよう努めます。

国王　頼んだぞ。もし王が同意してくれたら、結婚の祝賀には大公にも参列してもらいたい。日取りは彼に決めてもらおう。

大使　他に何かお伝えすることはございませんか？

国王　よろしく言っておいてくれ、さらばだ。バルサザーとは別れの挨拶は

したかな？

大使　もう済ませております。

国王　他の用件のうち、特に王子の身代金については忘れないでくれ。それは私のものではなくて王子を捕虜とした男のものであり、彼の意気には報わねばならないから。司法官の息子、ホレイショーのことだ。

大使　身代金の額については既に決定しておりますので、至急送らせていただきます。

国王　では、さらばだ。

大使　ごきげんよう、カスティール公爵様、他の皆様も。（退場）

国王　弟よ、お前にはなんとか頑張って、ベル＝インペリアが従うように諭してしてもらわねばならないな。若い女性は親類の意見に従ったほうが良いのだ。王子は優しいし、彼女を気に入っている。もし彼女が王子を無視して彼の愛を拒絶したなら、彼女だけでなく私の立場も悪くなる。私は出来る限り王子を歓待するから、あなたは娘を説得しなさい。もし彼女が言うことを聞かなかったら、全てが台無しになるのだから。（全員退場）

第４場　ホレイショー、ベル＝インペリア、ペドリンガーノ登場。

ホレイショー　夜が黒い翼で太陽の輝きを覆いはじめました。快楽は暗闇の中で行うものですから、さあ、ベル＝インペリア、東屋に行きましょう。あそこは安全です、楽しい時を過ごしましょう。

ベル＝インペリア　あなたについていきます、引き返したりはしません。ただ、私の魂は不安で押しつぶされています。

ホレイショー　ペドリンガーノが信じられないのですか？

ベル＝インペリア　いいえ、彼は自分のように信じています。ペドリンガーノ、門の外で見張っていなさい。誰か近づいたら私たちに知らせるのです。

ペドリンガーノ　（傍白）見張るのではなく、ロレンゾ様をこの逢引の場に連れて来てもっと金貨をもらおう。（退場）

ホレイショー　何を考えておられるのです？

ベル＝インペリア　自分でもわからないのですが、何か悪いことが起こる気がするのです。

ホレイショー　恋人よ、そのように言わないでください。運命の女神は私たちの味方です、そして天も私たちを楽しませるために昼を閉じ込めました。あそこに見える星たちは輝いて光るのをやめました。月も姿を隠して私たちの喜びに手を貸してくれています。

ベル＝インペリア　わかりました。疑わずに、不安はあなたの愛の言葉の中に沈めましょう。もう怖くはありません、心にあるのは愛だけです。座りましょうか、楽にしていたほうが楽しめますから。

ホレイショー　この葉の生い茂った東屋にあなたが座ると、花の女神はもっとたくさんの花々でここを飾ってくれるでしょう。

ベル＝インペリア　でも、もしホレイショーがここにいることに気づいたら、私が彼に引っ付きすぎているから彼女はやきもちを焼くはずだわ。

ホレイショー　お聞きなさい、鳥たちが鳴いています。ベル＝インペリアがいることを喜んでいるのでしょう。

ベル＝インペリア　いいえ、キューピッドがナイチンゲールになって、あなたの話に甘美な音楽を添えようとしているのです。

ホレイショー　キューピッドが歌っているのなら、ヴィーナスもそう遠くはないはずです。そうだ、あなたがヴィーナスだ、あるいはもっと美しい別の星でしょう。

ベル＝インペリア　私がヴィーナスなら、あなたは戦の神のマルスですね。マルスが治めるところでは戦争が起こるはずです。

ホレイショー　では、私たちの戦争をこのように開始しましょう。手を出して、私のこの荒々しい手と戦うのです。

ベル＝インペリア　足を前に出してください、私も足で突き返しますから。

ホレイショー　でも、まずは私の目があなたの目と戦います。

ベル＝インペリア　では防御してください、このキスの矢を放ちますから。

（ホレイショーにキスする）

ホレイショー　それではあなたの放った矢を私も返しましょう。（彼女にキスする）

ベル＝インペリア　それなら、この戦いに勝つために私の腕はあなたに絡みついてあなたを降参させましょう。（二人は抱き合う）

ホレイショー　いや、私の腕も太くて強いのです。このように蔓は楡の木に巻き付いて倒すのです。

ベル＝インペリア　ああ、放してください、興奮の中、命が尽きていくのが私の目の内に見えるはずです。

ホレイショー　待ってください、私もあなたと一緒に死にますから。それであなたは降伏しますが、私も征服されたのです。

ベル＝インペリア　誰、そこにいるのは？ペドリンガーノ？（ロレンゾ、バルサザー、サーベリン、ペドリンガーノ、変装して登場）裏切られたわ！

ロレンゾ　（バルサザーに）王子、彼女を向こうに連れて行ってください。（ホレイショーに）まあ、やめておけ。お前の勇敢さはよく分かったから。（サーベリンとペドリンガーノに）すぐに済ませろ。（彼らはホレイショーを東屋に吊るす）

ホレイショー　なに、私を殺すつもりか？

ロレンゾ　そうだ。それっ、それっ。これが愛の生んだ果実だ。（彼らはホレイショーを刺す）

ベル＝インペリア　彼を助けて、代わりに私を殺して！彼を助けてあげて、お兄さん、バルサザー！私はホレイショーを愛していますが、彼はそうではありません。

バルサザー　でも私がそうなのだ。

ロレンゾ　こいつは生きている間は野心家で傲慢だったが、死んだ今が一番高い所にいるな。

ベル＝インペリア　人殺し、人殺しよ！　助けて、ヒエロニモ、助けて！

ロレンゾ　さあ、彼女の口を塞げ。連れていくのだ。（全員退場）

第5場　ヒエロニモが寝間着を着て登場。

ヒエロニモ　裸の私をベッドから引き出したあの叫び声は何だ？これまでどんな危険にも怯まなかった私の心が今は恐怖で震え、ぞっとしている。ヒエロニモを呼んだのは誰だ？話してくれ、私はここだ。私は眠っていなかったから、あれは夢ではない。そうだ、助けを求めて叫ぶ女性の声がした。そう、ここで、この庭で女が叫んだ。助けなければいけない。待て、この死体は何だ？男が吊るされている、そして犯人は皆去っている、この庭で私に罪を被せるために。この庭は楽しみのために作ったのだ、人を殺すためではない。（死体を吊っている縄を切る）この男の服はよく見たことがあるが――ああ、これは私の息子、ホレイショーではないか！いや、生きている時は私の息子だった。私を呼んでベッドから起こしたのはお前だったのか？ああ、何か言ってくれ、まだ命の灯が残っているのなら！父さんだ！誰が私の息子を殺したのだ？人の心を持たない野蛮な怪物か、罪のないお前の血を貪り、死体をこのように無残に置き去って、この恐ろしい暗闇の中でお前を私の涙の海で溺れさせようとしたのは？おお、天よ、なぜ罪を覆い隠す夜を作ったのですか？昼であればこのような暗闇の殺人は行われなかったのに！おお、大地よ、なぜこの神聖な東屋を汚した悪人をその時飲み込んでくれなかったのですか？ああ、哀れなホレイショー、これから新しい人生が始まるところだったのに命を失うとは、お前はどんな間違いを犯したのだ？惨い殺し屋め、おまえたちがいかなる立場の人間であろうとも、なぜこのような善良な人間を絞殺したのだ？ああ、一番哀れなのはこの私、愛するホレイショーが死んで喜びは失われた。

イザベラ登場。

イザベラ　夫が戻ってこない、胸騒ぎがする。ヒエロニモ？

ヒエロニモ　ここだ、イザベラ。一緒に嘆いてくれ、溜息は堰き止められ、涙は全部出尽くしてしまった。

イザベラ　そんなに大げさになにを――私の息子、ホレイショー！ああ、こ

の終わりのない嘆きをもたらした犯人はどこ？

ヒエロニモ　それが分かれば悲しみも和らぐだろう、私の心を慰めるのは復讐なのだから。

イザベラ　では、犯人は逃げたのですか？息子は死んだのですか？ああ、ほとばしれ、涙よ、泉となり河となって！ふぶけ、溜息よ、やむことのない嵐を引き起こすのです。私たちの呪われた不幸にはこのような感情的な振る舞いが似つかわしい。(1602年版)ヒエロニモ、私の夫、何か言って。

ヒエロニモ　夜、息子と一緒に楽しく食事をしたが、公爵様のところにバルサザーを訪ねていくと言っていた。王子はあの屋敷に居られるからな。息子が外出してこれほど遅くなったことはない。部屋にいるのかもしれない、誰か行ってみてこい。ロドリーゴ！

ペドロとジェイクイーズ登場。

イザベラ　ああ、夫がおかしなことを言っている――ヒエロニモ。

ヒエロニモ　そうだ、スペイン中の誰もがそのことは知っている。それに、息子は皆に好かれているし、先日はお側で酌をするという名誉を国王から賜った。このように寵愛を受けていたのだから、息子が早死にするはずはない。

イザベラ　ヒエロニモ、お願いだから。

ヒエロニモ　この男はどこでホレイショーの服を手に入れたのだろう？誰か、誰か！全ての真相を知ってみせるぞ。ジェイクイーズ、直ちにカスティール公爵のところへ走れ、家に帰るようホレイショーに伝えるのだ。私もイザベラも今夜は変な夢を見た。聞いているのか？

ジェイクイーズ　はい。

ヒエロニモ　さあ、行け。ペドロ、こっちへ来い。これが誰か、知っているか。

ペドロ　よく存じております。

ヒエロニモ　よく、とは誰をだ？――イザベラ、黙れ。さあ、恥ずかしがらずに言うのだ。

ペドロ　ホレイショー様です、ご主人様。

ヒエロニモ　はは、これはお笑いだ、私よりおかしな者がいるのだな。

ペドロ　おかしいとは？

ヒエロニモ　そうだ。前は私もこれが息子のホレイショーだと思っていた。服がそっくりだからな。確かにそうではないか？

イザベラ　そうでなければ良かったのに！

ヒエロニモ　なに、イザベラ、夢でも見ているのか？このようなおぞましい犯罪が純粋で汚れのない私たちの息子に行われたということを、お前のその優しい心は受けとめられるのか？向こうへ行け、恥ずかしいことだ。

イザベラ　ヒエロニモ、あなたの悲しみを冷静に自分でご覧になってください。そのようなお考えでは何も正しく判断できなくなります。

ヒエロニモ　ここに吊るされていたのは男、そう、若い男だった。私が縄を切ったのだ。もし本当に息子だったとしたら――どうだろう、光を、蝋燭を貸せ、もう一度見てみよう。ああ、神様！破滅、不幸、拷問、死、そして地獄よ、恐怖で硬くなった私の冷たい胸にその針を突き刺すのだ。早く私を殺してくれ。病を引き起こす夜よ、お願いだから私も息子と同じように殺してくれ。この悲しみの廃墟を大きな暗闇で包んでくれ、私が生きながらえて光を見ることのないように――自分に息子がいたことを思い出しそうだから。

イザベラ　ああ、ホレイショー、私の息子！

ヒエロニモ　いつの間にか、悲しみと向き合わなくなっていたのか。(1602年版)美しい薔薇よ、お前は咲き開く前に摘み取られてしまった。美しい、立派な息子よ、お前は負けたのではなく、騙されたのだ。お前にキスしよう、涙のために言葉は出てこないから。

イザベラ　ホレイショーの瞼を閉じてあげましょう、昔はこの目が私の唯一の喜びだったのに。

ヒエロニモ　血に染まったこのハンカチが見えるか？復讐するまで私はこれを手放さずにいよう。まだ血を流しているこの傷口が見えるか？復讐を終

えるまでこの死体は埋葬しないでおこう。その時が来たら、不幸ではあるが喜びを感じることだろう。その時まで私の悲しみはなくなることはない。

イザベラ　天の神々は公正ですから、殺人は必ず露見します。時は真実と正義をもたらします、時がこの陰謀を明るみに出してくれます。

ヒエロニモ　イザベラ、しばらくの間は嘆くのをやめてくれ、悲しくないふりをするだけでもいい。そうすれば、すぐにこの犯罪の内容が明らかになり、犯人を見つけられるだろう。さあ、イザベラ、息子を抱き上げて、この呪われた場所から運び出そう。（ホレイショーの死体を抱える）私が葬送の言葉を語ろう、歌はこの場にはそぐわないから。（ヒエロニモは自分の胸を剣に当てる）「綺麗な泉の下で育った薬草を調合してください、私たちの痛みを和らげる薬をください。もし何年もの忘却をもたらす力があるのなら、そのような飲み物をください。私は太陽の光の下に生え出てくるどのような植物でも、世界中を回って集めます。賢い女性が作ったいかなる薬も、その秘密の力で調合されたいかなる薬草でも口にします。この死せる胸の中の全ての感覚がなくなるまで、たとえそれが死であれ私はどんなことにも立ち向かいます。私の命よ、もうあなたの目を見ることはないのですか、永遠の眠りがその目の光を埋めてしまったのですか？私もあなたと一緒に死にます、このように喜んで冥界に行きます。しかし急いで自らの命を絶つことはしません、それだとあなたの死の復讐が行われないままになりますから。」

ヒエロニモは剣を捨て、ホレイショーの死体を抱いて退場。

第6場　アンドレアの亡霊と復讐の神、舞台前に出てくる。

アンドレアの亡霊　お前が私をここに連れてきたのは、私の苦しみを増やすためだったのか？私はバルサザーが殺されると期待していたが、殺されたのは私の友人のホレイショーだった。それに私の最愛のベル＝インペリア――私を何よりも愛してくれた人――が不当な扱いをうけているではない

か。

復讐の神　まだ穂が青いというのにお前は収穫の話をするのか。何事も最後が肝心なのだ、穂が実らないと鎌は使えない。静かにしていなさい。ここを離れる前に、バルサザーが不幸になる様を見せるから。（アンドレアの幽霊と復讐の霊はそのまま残る）

第3幕

第1場　ポルトガル大公、貴族たち、ヴィラッポ登場。

大公　消えることのない数々の不安を抱えながら王座に座る国王というものは、なんと不幸であることか！はじめに王たちは最高の地位に据えられるが、その地位は激しい怒りによって奪われることが多い――常に運命の車輪のなすがままなのだ。最高の地位にいても私たちは喜ぶことはない、そこから追い落されることを恐れているから。様々な風が波にもたらす動きよりも、運命の女神が王たちの境遇にもたらす変化は大きい。王は畏怖の念を臣下に要求するが、愛されることを恐れてもいる。国王に対する畏怖や愛はお世辞であるからだ。実際、貴族たちよ、王であるこの私を見よ、唯一の後継者である最愛の息子を憎しみによって奪われたのだ。

貴族　アレクサンドロの心があのような憎悪で毒されているとは思ってもみませんでした。しかし今となっては、言葉と行いは別であり、また見た目で人は信頼できないということが分かりました。

ヴィラッポ　彼がバルサザーと同じ隊にいた頃の、裏切りを偽りの愛で装ったあの顔を見ておりましたら、地球の中心を刻々と回る太陽の方が王子に対するアレクサンドロの心よりも変わりやすいと思ったことでしょう。

大公　もうよい、ヴィラッポ、十分だ。お前の言葉は私の傷ついた心をさらに打ちのめす。アレクサンドロの処刑を引き延ばしたりはしない。誰か、反逆者を連れて来い。（数人の貴族たち退場）宣告どおりあいつは死ぬの

だ。

アレクサンドロ、貴族、鉾槍兵と共に登場。

貴族　このような不幸は耐えるしかないぞ。

アレクサンドロ　この最期の時にどのような忍耐がいるのでしょうか？この世を去ることにも未練はありません、悪ばかりが蔓延るのですから。

貴族　だが、最善の結果を祈るのだ。

アレクサンドロ　私の望みは天にあります。地上はあまりに汚れており、そこに私の期待するものはありません。

大公　何をしているのだ？その悪魔を前に出せ、呪われた行為のために死ぬのだ。

アレクサンドロ　陛下、私がこのように不満を抱いて死ぬのは、死の苦痛を恐れるからではありません。貴族というものはそのような卑しい恐怖に屈したりはしませんから。ただ、これだけが私の心を苦しめるのです――天も承知の通り、無実の罪を疑われてこのように死んでいくということが。

大公　黙れ、処刑台へ連れていけ！さあ、縄で縛れ。あいつの魂を待ち構えている冥界の火の川プレゲトンの前触れとなるこの炎の中であいつの体を焼くのだ。（アレクサンドロは杭に縛りつけられる）

アレクサンドロ　罪のない私の死の復讐はヴィラッポ、お前に降りかかるのだ、このように私に危害を加え、報酬目当てで嘘の告発をしたお前に。

ヴィラッポ　いや、アレクサンドロ、俺を脅すのなら、お前をアケロンの川にまで運ぶ助けをしてやろう、そこでお前のその言葉はお前の所業とともに滅びるのだ。無礼な反逆者、恐ろしい人殺しめ！

ポルトガル大使登場。

ポルトガル大使　待て、やめろ！陛下、ヴィラッポを捕らえるお許しをどうか。

大公　大使よ、そのように駆け込んできて、何の知らせだ。

ポルトガル大使　陛下、バルサザー様は生きております。

大公　なに、息子バルサザーが生きていると言ったのか？

ポルトガル大使　陛下の御子息のバルサザーは生きております。王子はスペインの宮廷で手厚くもてなされており、陛下にご挨拶を送るようにとのことです。この目で確かめました。また、ここに控えている私の従者たちとスペイン国王からの手紙が、王子がご無事であることの証拠です。（手紙を国王に渡す）

大公　（手紙を読む）「あなたの息子は生きており、献上金は受け取った。和平は成立し、私は満足している。後の次第は我が名誉とあなたの意向を踏まえた上で決定していきたい。」

ポルトガル大使　国王からのこれらの書面もどうぞ。（国王に手紙を渡す）

大公　（ヴィラッポに）呪われた奴め、高貴なアレクサンドロの命と名誉に対してこのような中傷を行うとは！さあ、彼を放してあげなさい。（アレクサンドロに）お前が受けた不名誉に対する仕返しとなるよう、これから死ぬことになるあいつにお前の縄を解かせよう。

アレクサンドロ、縄を解かれる。

アレクサンドロ　陛下、あのような忌まわしい犯罪を耳にしましたら、お立場上仕方のなかったことと思います。しかし、ヴィラッポ、お前が嘘の告発によって奪おうとした私の命は私自身の潔白によって救われたのだ。

大公　言え、不誠実なヴィラッポよ、なぜこのように我々を騙してアレクサンドロの命を奪おうとしたのだ？わが最愛の息子を殺したというようなことでもなければ、私が彼を疑ったりはしないということは知っているはずだ。

アレクサンドロ　忌まわしい行いを思い出して私の心は引き裂かれました。罪深い私の魂は宣告に従います。アレクサンドロが何か私に危害を加えたからということではなく、報酬と出世を目当てに私は恥もなくアレクサンドロの命を危険にさらしたのです。

大公　悪党め、その命はお前の死によって贖うことにしよう。それも、私の息子を殺したとお前が言った彼のためにここに作られた普通の責苦ではなく、お前の死のために最もひどい苦しみと痛みを与えるものを用意しよ

う。（アレクサンドロは王に懇願しようとする）頼んでも駄目だ、反逆者を連れていけ。（ヴィラッポ、鉾槍兵とともに退場）アレクサンドロ、お前の忠誠を皆に知らせてお前の名誉を称えよう。スペイン国王によってこの手紙に記された事項は閣議において協議し、決定しよう。さあ、アレクサンドロ、一緒に来なさい。（全員退場）

第2場　ヒエロニモ登場。

ヒエロニモ　おお、目よ、いや、目ではなく涙で溢れた泉よ！おお、命よ、いや、命ではなく生きているような死者よ！おお、世界よ、いや、世界ではなく、殺人と悪事に満ち、秩序を失った悪事の塊よ！おお、聖なる天の神々よ、もしこの罪深い行い、残酷で野蛮な業、もはや私のものでなくなった我が息子の例のないような殺害が明るみに出されず、また復讐もされないのなら、そしてもしあなたがその正義を信じている者たちを不当に扱うのなら、私たちはあなたのなすことをどうして正しいと言えるでしょうか？夜は私の嘆きの悲しい聞き手となり、恐ろしい幻影を見せて悩んだ私の心を揺り起こす。そして哀れな息子の傷を見せて、彼の死を皆に知らせるよう求める。醜い悪魔たちが地獄から現れて、誰も通らない道へと私の足を向かわせ、激しい怒りの感情で私の心を慄かせる。曇のかかった昼は私の悲しみを記録し、早くから私の夢を書き留め、殺人犯を探すよう私を駆り立てる。目、命、世界、天、地獄、夜、昼よ、見ろ、探せ、見せてくれ、送ってくれ、誰かを、何らかの方法を――（手紙が落ちてくる）何だ、これは？手紙だ。何だろう？ヒエロニモに宛てた手紙だ。（赤いインクで書かれている）

(1592年版)**ベル＝インペリア（二階舞台あるいは舞台袖から話す）**(1592年版)「インクがないので、私の血で書いたこの手紙を受け取ってください。不吉な星の下に生まれた私の兄は、あなたから私を隠してしまいました。バルサザーと兄に復讐しなさい、あなたの息子を殺したのはこの二人なのです。ヒエロニモ、ホレイショーの死を復讐しなさい、そしてベル＝インペリアよ

りも幸せになるのです。」

(1592年版)**ヒエロニモ**(1592年版)　この思いがけない奇跡はどういうことなのだ？私の息子がロレンゾと王子に殺された？あの二人がホレイショーを憎むどんな理由があったのだ？それに、もしロレンゾが犯人だったとしたら、ベル＝インペリアよ、なぜあなたは自分の兄を告発するのだ？ヒエロニモ、気をつけろ、おまえは騙されている。これはおまえの命を奪うための罠だ。よく考えろ、信用してはいけない、これはおまえを陥れるためのものだ。もしこの手紙に唆されて私がロレンゾを訴えたら、ロレンゾはその不名誉を理由にお前の命を狙い、お前を憎むことになるだろう。私の最愛の息子の命は大事なものであった。だからその死は私が復讐しなければいけない。では、ヒエロニモ、自分の命を大事にするのだ。生き延びて、決めたことは実行するのだ。この手紙に書かれた内容の真偽を確かめるために、できるだけ証拠を集めて調べよう。カスティール公爵の屋敷の近くで聞き耳を立て、できるならベル＝インペリアと会ってさらに話を聞くのだ。こちらからは何も漏らしたりはしないが。

ペドリンガーノ登場。

やあ、ペドリンガーノ。

ペドリンガーノ　ヒエロニモ様。

ヒエロニモ　ベル＝インペリア様はどこにおられますか？

ペドリンガーノ　わかりません。ちょうどご主人が来られました。

ロレンゾ登場。

ロレンゾ　どうした、誰だ？ヒエロニモか？

ヒエロニモ　はい。

ペドリンガーノ　（ロレンゾに）妹様を訪ねてきております。

ロレンゾ　どんな用事だ、ヒエロニモ？厄介な問題が起きて父上が妹をよそに移したのだが、私が伝えられることだったら教えてくれ、ヒエロニモ、妹に知らせるから。

ヒエロニモ　いえいえ、ありがとうございます。その必要はありません。請

願があって参ったのですが遅くなってしまいました。彼女がご不興を被ったとは残念です。

ロレンゾ　そうか、それなら私に言えばよい。

(1592年版)ヒエロニモ　いえ、そのようなことはできません。お気遣いはありがたいですが。(1592年版)

(1602年版)ヒエロニモ　あなたに、ですか？あなた様にはもっと大事な用件の時にお願いいたしましょう。これは些細なことですので。

ロレンゾ　かまわないから、ヒエロニモ、教えなさい。

ヒエロニモ　全く、本当につまらぬことでして。あなた様に対しては、私はこれまで仕事も怠って遅くなり、進めてはいませんでしたので。

ロレンゾ　どうした？

ヒエロニモ　本当にくだらないことなのです。息子の殺害、のようなことですが、まったくくだらないことでして。(1602年版)

ロレンゾ　では、また。

ヒエロニモ　（傍白）私の悲しみはどんな心も、私の考えはどんな舌も伝えることはできない。（退場）

ロレンゾ　来い、ペドリンガーノ。見たか？

ペドリンガーノ　はい、どうも怪しいですね。

ロレンゾ　あの忌まわしい悪党のサーベリンがホレイショーを殺したことを漏らしたのだろう。

ペドリンガーノ　それはありません。つい先日のことですし、あれ以来あいつとは一緒におりましたので。

ロレンゾ　たとえあいつがまだ秘密を漏らしていないとしても、脅されたり褒められたりすれば裏切るような男だ。あいつの気性はよく知っている、あいつを今回のことに使ったことを後悔している。だが、ペドリンガーノ、最悪の事態は避けねばならない。お前のことは自分と同じように信用している、だからこれを受け取ってくれ。（金を渡す）よく聞くがいい、このようにしよう。今夜、お前は聖ルイジ公園でサーベリンと会うのだ、

そう決心しろ。私の屋敷のすぐ裏にある公園だ、知っているだろう。そこで待ち構えて、あいつをしっかりと始末するのだ。こちらが生きるつもりなら、あいつは死なねばならない。

ペドリンガーノ　でも、どうやってサーベリンを来させますか？

ロレンゾ　それはまかせておけ。お前がいる場所で王子と私を待つように使いを送るから。

ペドリンガーノ　了解しました、やりましょう。それではあいつに会うために準備してまいります。

ロレンゾ　これで状況は変わると思うが、その暁には手柄によってお前は上に登ることになるからな。わかったか。（ペドリンガーノ退場）いるか、ジェロン！

小姓登場。

小姓　お呼びで？

ロレンゾ　サーベリンのところへ行って、今夜、屋敷の裏の聖ルイジ公園で王子と私に会うように伝えろ。

小姓　わかりました。

ロレンゾ　8時にしよう、必ず来るように言え。

小姓　では行ってまいります。（退場）

ロレンゾ　さて、ここまで準備した計画の仕上げとして、今夜ペドリンガーノが不幸なサーベリンを殺す場所に国王からの命令という事で見張りを立たせることにしよう。疑惑を避けようとするならこのようにせねばならない。災いから身を守るには計略が必要だ、そして悪事は別の悪事で片づけるというわけだ。ヒエロニモがベル＝インペリアのことを尋ねたのは怪しい、また何かよからぬことが起こる気がする。俺は自分の罪は知っているし、あいつらもそうだ。そしてそのことは片を付けた。金のために自分の魂を売り渡すようなやつらだ、金のためなら自分たちの命も危険にさらすだろう、俺の命を守るためにな。身分の低い者たちは死んだほうがましだ、もし生きて俺たちの立場を危うくするようなら。あいつらが生き残っ

て、俺がそれを不安に思うというわけにもいかない。俺が信じるのは自分だけだ、自分だけが友なのだ、あいつらには死んでもらおう。卑しい者たちはそうなる運命なのだから。（退場）

第3場　ペドリンガーノ、ピストルを持って登場。

ペドリンガーノ　さあ、ペドリンガーノ、ちゃんと動くようこのピストルに頼もう。運命の女神よ、今度も俺に幸運を授けてくれ。この意気込みが良い結果をもたらし、首尾よく的を狙えますように。ここに金はある、これは手付金だ。俺は夢に命を懸けているわけではない、ペドリンガーノは報酬を貰ったのだ。このように気前よく財布を開いてくれる人のために自分の良心を犠牲にしないようでは褒美にはありつけない。欲しがってはいるが貰えないままだ、俺のような人間が稼いでいる時にな。逮捕されたとしても、その時になればご主人様が間に入って処罰から守ってくれる。それに、この場所なら誰も疑ったりはしない。ここで待とう。

夜警たち登場。

夜警1　ここで見張りをするようにとはっきり言われたが、どういうことなのだろう？

夜警2　国王御自身の命令だ。

夜警3　だが、カスティール公爵の屋敷のこんなに近くで見張りをしたことは一度もなかったな。

夜警2　仕方がないさ。隠れろ、何か始まったようだ。（夜警たち、脇に隠れる）

サーベリン登場。

サーベリン　ここで待とう、サーベリン。ロレンゾ様の小姓がここで会うように言ったからな。もし誰かを捕まえるためだったら、この場所はうってつけだな。

ペドリンガーノ　（傍白）獲物の鳥がやってきた。さあ、今こそ男になるのだ。

サーベリン　ご主人様は随分遅いな。何のためにこんなに遅くに私を呼んだのだろう？

ペドリンガーノ　このためだ、サーベリン、いくぞ。（ピストルを撃つ）よし、奴は倒れた、約束は果たしだぞ。

夜警たち、前に出てくる。

夜警 1　聞こえたか、ピストルの音だ。

夜警 2　人が死んでいる。人殺しを捕まえろ。

ペドリンガーノ　地獄にいる魂の悲しみに賭けて、俺を捕まえようとする奴は殺す、司祭になってやろう。

夜警 3　いいや、お前のほうが罪を告白して、それを聞く司祭になるがいい。なぜこのように残酷にこの男を殺したのだ？

ペドリンガーノ　奴がこんな夜遅くに外を歩いていたからさ。

夜警 3　お前もこんな夜遅くに悪事をするくらいならベッドで寝ていたほうがよかったな。

夜警 2　司法官のところへこの人殺しを連れて行こう。

夜警 1　ではヒエロニモ様のところに行こう。死体も運んでいくから手伝ってくれ。

ペドリンガーノ　ヒエロニモか？どこへなりと連れていくがいい。彼が誰であれ、尋問には応じるから。どんなひどいことでもするがいい。お前たち皆の相手になってやろう。（全員退場）

第 4 場　ロレンゾとバルサザー登場。

バルサザー　どうした、こんなに早くから起きているとは？

ロレンゾ　災難を避けるのが遅くなるかと不安なのです。

バルサザー　まだ私たちが気づいていない問題でもあるというのか？

ロレンゾ　最大の危険は私たちがほとんど気づかないものなのです、そのようなことが一番命取りになります。

バルサザー　教えてくれ、ロレンゾ、私か君の名誉に関わるようなことなの

か？

ロレンゾ　はい、私かあなたか、というよりむしろ二人ともに関わることです。どうやら、おそらくそうにちがいないのですが、私たちの犯罪の仲間だったあの卑しい者たちによってホレイショー殺害のことがヒエロニモにばれたようなのです。

バルサザー　ばれただと、そんなはずはない。

ロレンゾ　自分が犯した罪のことで罪悪感がある者は簡単に間違えたりしないものです。きっとそうです、否定しないでください、全て彼にばれました。それで、このようにしたのですが――（小姓登場）小姓か。何だ？

小姓　サーベリンが殺されました。

バルサザー　なに、私の家来のサーベリンか？

小姓　その通りです。

ロレンゾ　言え、殺したのは誰だ？

小姓　その犯行のため逮捕された男です。

ロレンゾ　それで名前は？

小姓　ペドリンガーノ。

バルサザー　主人の私を愛してくれたあの男が殺されたのか？極悪人め、自分の友人を殺すとは！

ロレンゾ　ペドリンガーノがサーベリンを殺したのか？王子、この件に対する処分は厳罰とし、また早く執り行うよう国王にお願いしてください。この二人が仲間割れしたとは、危ないですね。

バルサザー　まかせておけ、ロレンゾ、奴は処刑だ、国王も反対はできないだろう。私の方は司法官による裁きを急がせることにしよう。憎むべき犯罪の罰としてあいつは死ぬのだ。（退場）

ロレンゾ　さて、この件も既に考えた作戦の通りだ。賢い者ならこのように経験で判断して動く。俺が計略を作り、王子が実行する。俺が罠をこしらえて、王子は鳥を捕まえるが、そこに鳥もちがついていたとは気づかない。自分の立場を守ろうとするなら、友人にさえこのように自分を無垢に

見せないといけないのだ。王子は俺が取るのを手伝った獲物に止めを刺す、そして誰もその仕掛けには気づかない。大勢の人間、いや、一人でさえ信用することはできない、皆秘密を洩らそうとするからな。

使者、手紙を持って登場。

おい！

小姓　はい。

ロレンゾ　誰だ？

使者　あなた様への手紙を持ってまいりました。

ロレンゾ　誰からだ？

使者　牢獄にいるペドリンガーノからです。（手紙を渡す）

ロレンゾ　あいつは牢獄にいるのか？

使者　そうです。

ロレンゾ　何の用だろう？（手紙を読む）主人として自分を窮地から救ってほしいと言っている。手紙は受け取った、了解したと伝えてくれ。このことの手配については安心するように言うのだ。行け、小姓を後で行かせるから。（使者退場）（傍白）自由自在だな。だが、もう一回ひねりを加えてみるか。小姓、ペドリンガーノにこの財布を渡しに行ってくれ。（小姓に財布を渡す）牢獄の場所はわかるな？こっそりとあいつに渡すのだ、誰もいないことを確かめてからな。陽気でいろ、だが秘密は守れと言うのだ。今日裁判があるが、釈放のことは心配するなと言え。赦免状にサインもした、だから動揺することはない、とな。できるだけのことはしようと思っているが、奴が縛り首になる直前までその赦免状を持ってずっとあいつの横にいるのだ。この箱を見せて、赦免状はここにあると言え。（箱を渡す）それを開けるなよ、命が惜しいなら。あいつにも、自分が頼みにしていることは誰にも言わないようにさせるのだ。ロレンゾが生きている限り、あいつが困ることはない。行け！

小姓　走っていきます。

ロレンゾ　しっかりとやるのだぞ。（小姓退場）さて、こちらの運も危うく

なってきた。だが今こそロレンゾは不安を消さなければいけない。あと一つやっておくことは、処刑人に会うことだ。何のためか？俺は空気にでさえ考えを打ち明けたりはしない、風がこっそりとそのことを俺たちを狙っている敵に告げるかもしれないから。自分のほしいものは、自分だけが知っている、他人は知らない。それで十分だ。（退場）

第5場　小姓、箱を持って登場。

小姓　この箱の中を見るなと言われたが、そう言われていなかったらこんなに悩むこともなかったのにな。俺たちのような若い奴は、女性と同様に信用ならないのだ、駄目だと言われたことはすぐにやろうとするから。えい、空けてみよう。（箱を開ける）何もない、空箱じゃないか！秘密を守る必要がないのなら、これは偉い方々の立派な悪行だと言ってやりたい。ペドリンガーノのところへ行って、この箱の中に赦免状があると言わないといけない。もし中を見ていなかったら、そのことに誓えたのだが。この赦免状を当てにしてあいつが絞首台を笑いものにし、周りの人たちを嘲って死刑執行人を馬鹿にすることを思うと笑わずにはいれないな。奴の傍に立って、あいつが何か冗談を言う度に「その調子、赦免状はここにあるから」とでも言う様にこの箱を指さして応じるなんて、変な冗談だ。冗談を言って死んでいくとはひどい冗談じゃないか？ああ、だが哀れなペドリンガーノ、お前のことはかわいそうだが、もし俺も一緒に縛り首になったらお前のために泣くことができなくなるからな。（退場）

第6場　ヒエロニモと彼の副官登場。

ヒエロニモ　こうやって私は他人の不幸のために働かねばならないのか、自分の不幸を解決する方法もわからないというのに。そして正義を与えねばならないのだ、私自身が受けた不当な扱いの全てについて何ら正しい処置もしてもらえないというのに。天の神々の正義によって、私があのことの真相を知って苦悩が終わる日が死ぬまでには訪れるのだろうか？私だけが

他の者たちに正義を示さねばならないが、神々も他の人たちも私にはそうしてくれない――私の体は疲れ果て、生きる力も費やされてしまった。

副官　ヒエロニモさま、罪を犯したものを罰するのがあなた様の役目です。

ヒエロニモ　そういうことなら、彼の死に対応することも私の役目であるはずだ、生きている時には私の命をさえ犠牲に出来た彼のために。だが、今日の仕事を始めよう。（胸を指して）ここには帰りたいという思いがあるのだが。

役人たち、箱を持った小姓、縛られたペドリンガーノ（手紙を持っている）登場。

副官　囚人を前へ、今から裁判を始める。

ペドリンガーノ　（小姓に）小僧よ、ありがとうな、来る頃だと思ってたぞ。ちょうどご主人様に別の手紙を書いたところだ、あの人御自身にも関わることでな。俺のことを忘れてもらっては困るから。だが、よく覚えておいでのようだ。さあさあ、仕事にとりかかろうか？

ヒエロニモ　前に出て来い、この怪物、人殺しめ。世間が納得できるように、自分が愚かであったことを認め、罪を悔いるのだ。お前はここで処刑されるのだから。

ペドリンガーノ　いやに手短だな。はい、司法官様に告白します、死も覚悟しています、私がサーベリンを殺しました。ですが、あなたさまの思うとおりに、その悪行の報いを受けて私がここで死ぬとお思いですか？

副官　そうだ、ペドリンガーノ。

ペドリンガーノ　そうは思いませんが。

ヒエロニモ　黙れ、生意気な奴だ。そうなることをわからせよう。私が裁く限り、血は血で贖われることになる、法は実行されるのだ。私の方はそのような裁きは得られないが、他の者たちの権利は保証してあげたい。急げ、犯行は証明され、告白されたのだから。法に従ってこの男は死刑だ。

絞首刑係　さあ、準備はいいか？

ペドリンガーノ　何の準備だい、お役人さん？

絞首刑係　これにぶら下がる準備さ。

ペドリンガーノ　だいぶん急いでいるな。俺の首に縄をかけて、最後に服を貰おうっていう魂胆だな。この服を脱いで、縄にかかるということか。だが、お前のたくらみはお見通しだよ。見返りもないのに服を脱いだりはしないからな。

絞首刑係　さあ。

ペドリンガーノ　ここに登るのかい？

絞首刑係　あきらめろ。

ペドリンガーノ　でも俺がここから降りる見込みはあるのさ。

絞首刑係　その通り、これで降ろすからな。（縄を指さす）

ペドリンガーノ　何、吊るされるってことか？

絞首刑係　そうだ、さあ、準備はいいか？急いでくれ、日が暮れてしまう。

ペドリンガーノ　決まった時間に縛り首をするのかい？だとしたら、その古いしきたりは俺が壊すことになるかもな。

絞首刑係　そう、そしてお前のその若い首を俺が壊すことになる。

ペドリンガーノ　俺を馬鹿にしてるのか？俺が生き残って、仕返しにお前の頭を叩くということにならないよう祈るんだな。

絞首刑係　お前は背が低いから俺の頭には手が届かないだろう。俺がこの仕事をしている間、お前の背が伸びたりしないといいが。

ペドリンガーノ　おい、箱を持ったあの小僧が見えるか？

絞首刑係　箱を指さしているあいつのことか？

ペドリンガーノ　そうだ。

絞首刑係　知らないが、何かあるのか？

ペドリンガーノ　あいつの古くなった上着をお前が新しい上着に仕立て直すまで、自分が生きているとでも思っているのか？

絞首刑係　そうさ、その後も何年も生きて、お前やあいつよりは正直な人間を縛り首にするつもりだ。

ペドリンガーノ　あいつの箱に何が入っていると思う？

絞首刑係　わからないが、そんなことはかまわん。お前の方こそ、自分の魂のことを考えておいたほうがいいぞ。

ペドリンガーノ　なんだと、絞首刑係め。体に良いものは魂にも良いはずだ。あの箱の中には両方に効く香油が入っているのだ。

絞首刑係　俺の仕事の世話になったやつでお前ほど陽気な奴はいなかったな。

ペドリンガーノ　このお前の悪行も仕事と言えるのか？

絞首刑係　そのことは、悪人のお前が処刑されるのを見た人たちが認めてくれる。

ペドリンガーノ　ここにいる人たちに俺と一緒に祈るよう言ってくれ。

絞首刑係　それは良い心がけだ。皆さま、これは大した奴でして。

ペドリンガーノ　今思い出したが、そのことは後回しだ。今は必要ないからな。

ヒエロニモ　こんな恥知らずな男は見たことがない。恐ろしい世の中だ、殺人がこんなに軽く扱われるとは。そして、天に住まうべき魂が茨の道をさ迷い歩き、禁じられたことにのみ喜びを求めて幸福から離れていくとは！人殺し、恐ろしい怪物だ！このように邪悪な犯罪が罰を受けずにすむことがありませんように。急いで処刑を行うのだ。このことは私の息子を思い出させる。（絞首刑係はペドリンガーノの処刑の準備を始める）

ペドリンガーノ　ま、待て、急ぐな。

副官　何をしている？助かるとでも思っているのか？

ペドリンガーノ　そうだ。

絞首刑係　どうやって？

ペドリンガーノ　悪党め、国王の赦免状が――

絞首刑係　それに頼るのなら、これで終わりだ。（ペドリンガーノを吊るす）

副官　絞首刑係よ、死体を運び出せ。だが埋葬はするな。天も人も忌むべきもので大地が窒息し、汚れたりしないように。（全員退場）